昭和60年(1985年)6月10日　教皇様の声　(昭和59年10月1日第三種郵便物認可)

6　JUNE, 1985　毎月10日発行　第62号

教皇様の声

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
©1985 精道教育促進協会 ☎(芦屋)三二・三四五二 芦屋市船戸町12—6

神との出会い

主は、苦しむ人の近くに、常においでになります。

「実に、彼は私たちの労苦を背負い、私たちの苦しみを担った。(…)　その心の試練のち彼は光を見、それに満たされる。正しいしもべは、その苦しみによって多くの人を義とし、その罪をみずから背負う。」(イザヤ53・4、11)

①　今読んだばかりのイザヤ書はキリストご降誕の五世紀ばかり昔に書かれたものですが、そこには救い主の苦しみが描写されてあります。マテオ福音史家はその箇所をイエズスにあてはめています。「彼はわれわれのわずらいを取り去り、われわれの病気を背負った」と。(マテオ8・17)

主のしもべの歌と称されるイザヤの章句は、主の苦しみだけでなく、復活で頂点に達する主のご受難の意味を教えてくれます。この意味は、信仰によってキリストと一つになっているならば、人間の苦しみの意味でもあります。兄弟姉妹のみなさん、私は文書の一つで人間の苦しみのキリスト教的な意味について説明を試みました。「苦しみを通して贖いを実現させるにあたり、キリストは人間の苦しみを贖いのレベルにまで高めてくださった。かくして苦しむ人間はだれでも、キリストの救いをもたらす苦しみに与ることができる。」(『苦しみのもつ救いの力』19)(…)

私自身が経験したことでもあるので、みなさんの状態は痛いほどよくわかるつもりです。

力が衰えてゆくいわゆる衰弱についてお話しています。弱くなると、世話をしてくれる人の手中で私たちはモノになったかのように感じられます。衰弱と、それに伴う無為のために、病者は自分の内に閉じ込もってしまうことがあります。病によって、神に一層近づくこともあれば、絶望に陥ることもあり得ます。しかし病とは常に、神がとくに苦しむ人の近くにおいでになるときであります。

イエズスは、愛の心で病者に近づき、慈しみ深い御手を差しのべて、病者が信仰を一層生き生きとさせ、全体的な救いをもっと熱心に望むよう、助けてくださいます。イエズスは何度も病を癒されましたが(マルコ1・34参照)、なかんずく、病の値打を高めて、主の贖いに役立たせてくださったのです。

イエズスのこのような態度はキリスト者の心の特長であり、私たちが病者訪問によってまねるべき点であります。(マテオ25・36参照)病に伏す人たちへの心づかいや世話こそ、キリスト者の特長です。快く犠牲をささげて病者に仕えるところに、最高の徳、愛徳が光り輝きます。

病に伏す人をないがしろにしてはならない

②　現代生活の様々な情況と人間の心に巣食う利己主義が往々にして病者をないがしろにしています。病に伏す人々が社会の進歩に役立たぬ存在であると無意識のうちに考えてしまうのでしょう。病の回復に必要な手は打つけれども、病者を訪れ、慰めを与えることなど時間の無駄であると判断する危険もあります。

ご存じのように、いかに見事な技術を駆使しても医療技術だけでは不充分なのです。病者とて人間ですから、愛する人々や友が暖かい心でかたわらにいてあげなければなりません。そばに居る人があること自体が霊的な薬となり、生きることを愛し、生きるために戦う原動力を与えてくれます。この力が、回復するためにいかに大切かは申すまでもないでしょう。今日健康を享受していても、明日苦しみのうちに病床に伏すかもしれません。そうなると、親類縁者や友人の愛を感じるよろこびを得ることでしょう。イザヤ書の言葉は対照的です。「彼は、人から軽蔑され、捨てられた、苦しみの人、……無視された人。」(53・3)

技術社会は、ほとんど無感覚で長持ちのする人、仕事と生産のための人間を、夢見たことでしょう。しかし、イエズスは、人間そのもの、その力と弱さを愛せよと、お教えになります。(…)「人間の苦しみの世界は、もう一つの世界をたえず求める。すなわち愛の世界である。無私の愛が心と行為に息づくのは、苦しみのおかげであるとも言えよう。隣人の苦しみに知らぬふりをすることはできない。」(『苦しみのもつ救いの力』29)

慈しみ深い愛を受け入れることのできる人だけが利己心に負けず隣人を愛することのできる人です。イエズスの目には、病者こそ、人間の尊さを示すしるしであります。イエズスは、病者にご自分を示し、私たちには彼らに仕えよと仰せになります。真の人間愛を示せとお命じになるのです。

失意のとき

③　重病にかかると失意のときを迎え、なんのために生きるのかと自問してしまいます。そのようなとき、無言のうちに祈りつつそばに居る友があれば大いに力づけられるものです。しかし、とことんまで傷ついた心にさえ言葉で言えぬ希望を与えるのは、結局のところ神との出会いのみであります。

私たちがイエズスと同じように心の底から「神よ、神よ、なぜ私を見捨てられたのか」(詩篇22・2、マテオ27・46、マルコ13・54)と叫ぶとき、苦痛をやわらげ、慰めを与えることがおできになるのは、神のみです。苦しみのさなか神のしもべが得る慰めこそ、この神からの慰めです。「贖いとしてわが身をささげることによって、末長く子孫を見るだろう。神のみ旨はこうして実現する。」(イザ

■病によって、神に一層近づくこともあれば、絶望に陥ることもある。しかし病とは常に、神がとくに苦しむ人々の近くにおいでになるときである。

ヤ53・10)

キリストの十字架は人間の苦しみの神秘に光をそそいでくれます。十字架においてのみ、苦しむ人の心から出る哀願に応えることができるのです。聖人とはこの点を深く理解した人たちのことです。彼らは、苦しみをよろこびのうちに受け入れるだけでなく、主のご受難に与りたいと強く望んだものです。使徒聖パウロの言葉を自らの思いとしたのです。「キリストの体である教会のために、私の体をもってキリストの苦しみの欠けたところを満たそうとする。」(コロサイ1・24)十字架上のキリストと一致すれば、苦しみは宝、死は利益、という真理を身をもって体験できるのです。

(フィリッピ1・21参照)(…)

④ 神の恩寵をうけて、信仰に生き、希望を強められ、愛徳の火を灯されているとき、私たち信者が受ける慰めこそ、以上のべた点なのです。キリストが勝ち得てくださった解放はこのようにして現実のものとなります。神秘的だが効果的に、死が命になったと言えるからです。贖いという豊かな実を結ぶのは、麦の粒の自己をおしまぬ死であります。(ヨハネ12・24参照)これについてはイザヤ預言者が生き生きと歌っています。「正しいしもべは、その苦しみによって多くの人を義とした」(イザヤ53・11)「それゆえ私は報いとして、おびただしい人を彼に与える。」(53・12)(…)

私はみなさん方に兄弟としての心をあわせると共に、最良のもの、すなわち、健康、幸せ、平和、愛する人々の訪問、とくに、みなさんが救いをもたらすキリストの苦しみに一致されるよう、神の祝福を祈ります。みなさんの命、そしてこの病のときを、目的も値打もないなどとは考えないでください。このときこそ、神のみ前で、みなさんとみなさんが愛する方々、またそれ以外の人々にとって、最も実りの多いときになりうるのですから。

(ペルーで病者の一団へ)

聖母を心の中に、生活のうちに

お告げの祈りの時が近づくにつれて、私たちの心はイエズスの母が十字架のかたわらに立っていたあのカルワリオにむかいます。(ヨハネ19・25参照)　そこではイエズスにいちばん愛された使徒、最後の晩さんのとき主の御胸によりそっていた(ヨハネ13・25参照)若いヨハネも一緒です。「キリストの御胸から知恵の宝と神の慈悲の神秘を引きだした」(聖アンブロジオ)聖ヨハネは、他の福音史家が言っていないことを教会に書き残してくれました。「キリストの十字架のかたわらにイエズスの母は立っていた」と。

マリアの長い沈黙の道行、それはナザレトでのよろこびにみちた「なれかし」に始まり、神殿に御子をささげたとき、不可解な預言によって黒雲におおわれます。そして、カルワリオに至り救いの頂点に達するのです。「御母の情け深いまなざしは傷だらけの御子にむけられた。その傷から世の救いがもたらされることを聖母は知っていたのです。」(聖アンブロジオ)

聖母は十字架上で御子と共にはりつけにされ(ガラツィア2・20参照)、母として苦悶しながらも、弟子として英雄的な信仰のうちに我が子の死にゆく様をじっと見守っていました。「そして、自らが育てたいけにえを犠牲にささげたのです。」そこでマリアは、最後の「フィアット」(なれかし)を口にし、私たちのかわりに御父のみ旨を果たし、私たち全員をご自分の子として集めてくださいました。すべては、「婦人よ、これがあなたの子です」(ヨハネ19・26)というキリストの遺言の実行であったのです。

「これがあなたの母だ。」　イエズスは使徒ヨハネにおおせられました。「そのときからその弟子は、マリアを家にひきとった。」(ヨハネ19・27)童貞のヨハネは処女マリアを、光とし、宝とし、善として、つまり主からのもっとも貴重な贈り物として受け容れました。ヨハネは子としての愛情をそそいで聖母をお愛ししたのです。「それゆえ神の秘義のお住まいである御方のすぐかたわらにいるヨハネが、他の誰にもまして神の秘義を詳しく述べているのは当然だと思われる。」　聖アンブロジオはこのように言っています。

若者たちよ、マリア様を君たちの心の中に、生活のうちに、受け容れてください。天国での永遠のイースターを待ち望みつつ、復活の光をうけて新世界を建設するために、みなさんの信仰の星、過ぎ越しの旅を照らす星として、マリア様が導いてくださいますように。

聖トマス・アクィナス哲学

天使的博士の教会への誠実と絶対の忠実

ローマのアンジェリクム、グレゴリアナ両大学他で、聖トマス・アクィナス哲学についてお話になったことを、断片的ですが、集めてみました。

昔も今も、信仰と奉献生活の(難破の原因となるもの)、苦悩と当惑の原因となること、それは哲学の危機であります。本気で真剣になって人文面のしっかりとした教養を身につけなければなりません。第二バチカン公会議は、聖トマス・アクィナスを師とし博士として受け容れるべきであると強調しました。(久遠の哲学)の光を受け、(久遠の哲学)を基礎としてのみ、キリスト教の教理の論理的で確固とした建物を築くことができるからです。

★★★★

トマス・アクィナスの哲学全体は、美しく魅力的、かつ単純であります。深遠な思想を表現するために、難解な言葉など不必要であることがよくわかります。

トマス哲学の特徴

トマス哲学がひらかれた哲学であると言われるのは、それが(存在の哲学)であること、すなわち、(あるの現実態(または、存在の現実態))を根本、源としているからです。それが超越的な価値を有するのは、自立的存在にして純粋現実態、つまり神についての知識を得るための最短距離に位置するから。ゆえにこの哲学は、存在称揚の哲学、存在するもの全ての讃歌である、とも言えましょう。

★★★★

神学がトマス哲学からいかほどの貢献を得ているか、強調するまでもありますまい。神学とは、信仰により知を求めること、つまり信仰の知であるからです。それゆえ、神学が久遠の哲学を放棄することはできません。

知的多様性

トマス・アクィナスの哲学を受け容れれば正当な文化の多様性や思想の発展を阻害することになるのではないか。このような恐れに根拠はありません。なぜでしょう?　それは、

説教・講話・書簡等の抄訳

その方法原理（それによれば、現実の豊かな内容全体の源は〈あるの現実態〉である）、いわば、現実との関係において真なるものすべてに対する権利をもともと持っているからです。逆に、現実を把握するということは、存在の哲学において完全に市民権を有しています。しかも、誰がこのような認識を発展させたか、どの学派に属するのか、とは関係なしに、であります。

★★★★

長い歴史を有する神学は、人類史のうちに示され、素晴らしい宇宙に写し出されてある、神の計画の測り知れぬ豊かさを理解するため、つねに同盟者を求めてきました。

★★★★

もちろん、賢明に判断した上で同盟者を求めなければなりません。神学者は、神学の方法が要求する規準にもとづいて同盟者を選ばなければならないのです。

★★★★

過去には数多くの神学の学派があったことはよく知られており、今日でもそれら諸学派の単なる意見や学説の正当性は認められています。ただし、信仰の遺産はつねに完全なかたちで保存されるべきであり、それゆえ、神学者は信仰に反する哲学の公理を斥けなければなりません。

★★★★

思想のなかには、その底にある問題提起や主唱者の学説展開の仕方から見て、神学研究に協力できるだけの条件を備えていないものもあります。このような場合には、神学あるいは哲学説が提起する事柄を明快な批判精神で品定めし、神学の退歩をもたらすものは全て捨てなければなりません。ここでも聖パウロの次の言葉がぴったりとあてはまります。「すべてを試して、良いものを選べ。」（テサロニケ①5・21）

★★★★

というわけで識別力を養わなければなりません。そのためにはしっかりとした神学教育がすこぶる重要になります。神学面の形成が確かであれば、神学研究は、自らの固有の方法と道具の主人として、神のおことばに隠された底知れぬ豊かな富を探ることができるでしょう。そこで始めて神のおことばは、神学者の手中で、生きているもの、行なうもの、両刃の剣よりも鋭いものとなって、魂と霊、関節と骨髄とを切り分けて通り、心の思考と考えとをわけるほどのものとなるのです。（ヘブライ4・12参照）

信仰のしもべたる哲学、信仰についての理性的かつ組織的考察としての神学

天使的博士の哲学は、最高の源として創造主なる神をもつ自然の真理を征服していますから、〈信仰の婢女（はしため）〉となるにふさわしいと言えます。だからと言って、哲学自体、自らを卑しめることにも自らの研究範囲をせばめることにもなりません。それどころか、人間の理性のみによっては思いも至らぬほどの発展を遂げることができます。

★★★★

神学は聖トマスの哲学を捨てることはできません。聖トマス・アクィナスにならい、神学者は哲学を神学に役立てなければなりません。

★★★★

すべて学問は自らに固有な原理を支えにしなければなりません。神学が提起された問題を解決するとき、最終的には〈信仰の原理〉を根拠にしなければならないのです。

★★★★

聖トマス・アクィナスの特徴は、教会教導職に対する誠実で絶対の忠実でありました。ただし、ここで言う忠実とは、責任のがれでも、偽りの慎重さに負けることでもありません。神が与え給うた富を黙想し、理解を深めることです。また、忠実とは従順の実行でもあります。聖パウロの言う〈信仰の従順〉の反映なのです。

聖トマスの場合、厳密をきわめた研究方法と、ペトロに委託された神の啓示を絶対的に尊重する態度とが、見事に一致しています。

★★★★

聖トマスは、信仰に照らされ、浄められ、高められた、豊かな理性をもって、人間に関する諸問題を見つめました。

★★★★

トマス哲学の特徴は、開かれた精神と普遍性であり、その哲学が永遠に有効であることを保証するのは、彼自身の〈真理追求〉への態度に外なりません。

★★★★

聖トマスの場合、研究方法にもまして大切なのはその〈聖人の方法〉と言えます。すなわち、愛をすべてとする福音を十全に生きる人の研究であったということです。〈真なるものの知識は愛熱によって与えられる。〉

★★★★

はっきり申しましょう。本当の神学研究は、〈ひざまずくこと〉なくしては、始めることも終えることもできないと。少なくとも心のなかで、〈愛と真理のうちに御父を礼拝する〉ところから始めなければならないのです。

中途半端

創造主、立法者、裁判官であらせられる神を、否定するか、あるいは肯定しない、という態度をとるだけで、道徳的な相対主義におちいり、善悪の区別がつかなくなる。自動的に倫理性の規準を見失ってしまうのだ。

幻影

私たちが欺かれ易い幻影がある。社会を変えんと望みながら、外的な構造のみを変え、人間の物的な必要さえみたせばよいと考えることである。本当は、キリストにならい、自分自身を変えること、道徳的自己刷新、内側から自分を変えることから始めなければならないのに。心に巣食う利己主義と罪のもとを破壊する方が先決であるのに。

自らを変えた人でなければ、社会を効果的に変えることはできない。

諸徳

新聞にも取り上げられず、ひとに知られることもほとんどないが、剛毅は、いたるところでしばしば英雄的な行ないに発揮されている。それに気づくのは、人間の良心、そして神だけ。こうした勇気ある行ないをする無名の人々すべてに、私は賛嘆のことばをささげたい。

黙想のしおり❼

キリスト者のもつよろこびを言葉で言い尽くすことはできない。それは霊的なものであるだけでなく、秘義の一部をなしているからである。イエズスは人間となった神のみことば、人間の贖い主であると信じる人なら、心の奥底で大きなよろこび、つまり慰め、平和、委託、歓喜を感じないわけにはゆかない。十字架につけられ、のち復活したキリストに対する信仰、その信仰から生まれるこのよろこびを消し去らないでください。あなたたちのよろこびを人々に示しなさい。よろこびをもつうれしさを、決して失わないように。

正義への飢えや、真理と世界の道徳的秩序のために戦うことが急を要するとは言え、それが憎しみに変わったり、憎しみをひきおこす根源になったりしてはいけない。

不変の教え

テクノロジーは真に人間のためになるもの ②

前回は、悲しみの聖母と聖十字架称讃との関係を説明、今回は、テクノロジーを十字架の使信との関係の中で考えておられます。

シラの書

5　永遠の知恵は世に下った。人となり処女マリアよりお生まれになった御子がその知恵をお語りになりました。

それならば、永遠の知恵は初めから、御子がこの地上でお住みになる所を定めた時に、マリアをも包んでいたということになります。「ヤコブに住まいを定め、イスラエルの所有地に入れ。」(シラ24・13)　なぜならマリアはイスラエルの娘であり、ヤコブの家系の出身でしたから。マリアはキリストの御母です！

シラの書に書かれたことばは、マリアにおいて、見事に現実のものとなりました。ナザレトの、名もない隠れたおとめ。「世紀より前に、初めから、主は私をつくられ、永遠に存在を続ける。」(シラ24・9)　我らの父である神の最愛の娘マリア、御身は世紀より前に神の知恵のうちにまことに予知されていたお方です。世紀より前にこの知恵によって御子が私たちに与えられたから。

神の御子の最愛の御母！

聖霊の花嫁であられる処女！

三位一体の幕屋に住まわれているお方！

まことに御身は神のご計画の中心にいつもおいでになります。

さらに知恵が、シラの書のもう少し後で宣言していることも、やはり真実です。「清い幕屋の中で、そのみ前で、私は儀式を行ない、シオンに住まいを置いた。……エルサレムで権勢をふるう。」(シラ24・10～11)

6　これはすべて永遠の知恵によって引き起こされたこと。そしてやがて永遠の知恵はそれを包み隠してしまう。全く何もなくなってしまったと言ってもよい程に、キリストの十字架の上で。けれどもまさにその場所で、つまりキリストの十字架上で、永遠の知恵は御身の奉仕とちからを明らかにしてくださいました。「これがあなたの母だ。」　こう言って、永遠の知恵は、御身の奉仕と力を明らかになさったのです。

このおことばを聞いたのはヨハネただ一人でしたが、ヨハネを通してすべての人が――だれもが、そして一人ひとりが――このおことばを耳にします。

御母よ、これは御身の奉仕、御身の聖なる奉仕です！

御母よ、これは御身のちからです！

この聖なる奉仕、最も聖なる奉仕によって、この慈愛に満ちた力を通して、御身は「光栄に満ちた民に、主の領土に、その所有地に根を張られました。」(シラ24・13)

私たちはみな、御身に母になっていただきたいと願っています。十字架につけられたキリストが御身を母として私たちに残してくださいましたから。キリストのこの行為は永遠の知恵の果実です。私たちはみな、心を獲得する御身の慈悲深い奉仕を望んでいます。キリストの秘義全体から生まれた慈悲深い奉仕であるこの力を待ちこがれているのです。

悲しみの聖母という称号はまさにこれを意味しています。Alma Socia Christi はまさにこの意味です。なぜなら御身は、永遠の知恵が明らかにした秘義、私たちがより一層深くあずかりたいと願っているキリストのすべての秘義のうちに、キリストと固く結びつけて考えられてきたからです。「私を食う者はふたたび慕い寄り、飲む者はまた望む。」(シラ24・21)

マリアの苦しみ

7　兄弟姉妹のみなさん、今日の典礼を通して、キリストの祈りと祈願そして御母の愛が、このテクノロジーの世界の苦労と試練を経験しているすべての人に与えられます。(…)

―なんらかの形でテクノロジー社会を構成しておられるすべてのみなさん、すなわち、産業界で働いておられる方々や財政、通商、教育、出版、情報科学、医療研究、芸術活動に従事していらっしゃるすべての人、地域社会の指導者の方々、直接あるいは間接に何百万人もの人々を雇用しておられる方々に。

―失業中のみなさんと、経済的危機の混乱に巻き込まれ、その社会的影響をこうむっておられるすべての方々に。

―貧しい人々、疎外感を味わっておられる人々、そして一致を渇望しておられるすべての人に。

希望をもって生きるすべての人のため

8　キリストの祈りは、高くかかげられ永遠の知恵の光で日々の生活を照らす十字架のかたわらで希望をもって生きる、すべての人のためのものです。そしてその十字架の下には、あなたと並んであの慈愛にみちた御母がおいでになる。悲しみを経験し、苦悩を理解し、母として女性として、一人ひとりの人間を慈悲深く見つめ配慮し、すべての人を安心させてくださる御母が。

希望のためのテクノロジー

9　そしてきょう私はみなさん方全員にお願いしたいと思います。テクノロジーを十字架のメッセージとの関わりの中でとらえ、その力が希望に貢献するようご自分の役目を果たしてくださいと。テクノロジーは人間の幸福のためにすこぶる大きな貢献をしてきました。人間の状況をよりよいものにし、人間に貢献し、その仕事を促進、改良するために、たいへん多くの働きをなしてきました。とはいえテクノロジーは、時として、それ自体の忠誠の最大限度がどれくらいなのか、つまり人間のためなのか人間にとって不利になることなのか、決定できないときがある。貧しい人々の助けとなる可能性をもつその同じテクノロジーが、時には貧困の一因となったり、仕事の機会を制限したり、人間の創造力の可能性をうばったりすることさえあるのです。あれやこれやの場合において、テクノロジーは、もはや人間の味方ではなくなってしまいます。(…)

テクノロジーは、その最終的そして最も偉大な功績において、比類なく大きなあの神の知恵を賞賛するよう私たちを導いてくれることでしょう。テクノロジーを可能にし、同時にキリストの十字架からその限界をも明らかにしている神の知恵を。そしてキリストの十字架から、神の知恵はあらゆるテクノロジーが貢献すべき新しい地球、御母の愛につつまれた地球を描いています。その御母に私たちは今日、祈りをお捧げします。

ああ、マリア、私たちをキリストへとお導きください。

私たちのために、私たち人間の世界の上で、永遠の知恵の空に輝く明けの星となってください。アーメン。(トロントにて　九・十五)

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部七十円送料四十円　■一年予約八〇〇円送料五〇〇円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替　神戸　3-72393